

## 【報告】

## 新型うつ病の医療情報

## ー全国3大紙のテキストマイニングによる解析ー

北 浩樹<sup>1)\*</sup>, 伊藤千裕<sup>1)</sup>, 木内喜孝<sup>1)</sup>

1) 東北大学保健管理センター

新型うつ病は精神医学のうえでは専門用語ではなくマスコミ用語とされている。日本うつ病学会による解説によれば、① 若年者に多く全体に軽症で、訴える症状は軽症のうつ病と判断が難しい。② 仕事では抑うつ的になる、あるいは仕事を回避する傾向がある。ところが余暇は楽しく過ごせる。③ 仕事や学業上の困難をきっかけに発症する。④ 患者さんの病前性格として成熟度が低く、規範や秩序あるいは他者への配慮に乏しい、などとされている。本研究では、新型うつ病に関する新聞記事をテキストマイニングの手法によって調べたところ、職場における新型うつ病の増加という新型うつ病の動向を解説する記事が多かった。また記事は2009年に初めてみられ、2012年のピーク後は急減して2022年にはみられなくなった。記事中の新型うつ病の概要は、日本うつ病学会による解説とほぼ合致するもので、正確で信頼性の高いものと考えられた。

## 1. 緒言

近年、新たな特徴をもつ抑うつが存在が認識されており、いわゆる新型うつ病として知られている。しかし、うつ病に関する精神医学の専門学会である日本うつ病学会は、新型うつ病という専門用語は存在せず啓発書やマスメディアで使われる新型うつ病は、教科書的なうつ病のプロトタイプに合致しないうつ病・抑うつ状態を広く指して用いられているとの見解を表明している<sup>1, 2)</sup>。一方、マスメディアによる新型うつ病の報道として「NHKスペシャル 職場を襲う“新型うつ”」では、企業におけるうつ病を中心としたメンタルヘルスの緊急の課題として新型うつ病をとりあげ、新型うつ病は若者に多くみられて従来型のうつ病と同様に不眠や気分の落ち込みなどの症状を呈するものの、常にうつ症状に陥っているわけではないとしている。また職場を離れ気分が回復し、趣味や旅行などの好きなことには活動的になり、うつになった原因は自分ではなく、職場など他人にあると考える自己中心的な性格がよくみられるという<sup>3, 4)</sup>。

日本うつ病学会によれば、世間で新型うつ病とされるのは一般に次のような特徴をもつ<sup>1)</sup>。

① 若年者に多く全体に軽症で、訴える症状は軽症の

うつ病と判断が難しい。

② 仕事では抑うつ的になる、あるいは仕事を回避する傾向がある。ところが余暇は楽しく過ごせる。

③ 仕事や学業上の困難をきっかけに発症する。

④ 患者さんの病前性格として、“成熟度が低く、規範や秩序あるいは他者への配慮に乏しい”などが指摘される。

このように新型うつ病は若年者に多い特徴をもつが、若年者のうつ病・抑うつ状態は、これまでも精神医学的な理解が難しいとされてきた。古くは、ステューデントアパシー<sup>5)</sup>、退却神経症<sup>6)</sup>、逃避型抑うつ<sup>7)</sup>、などの概念が提唱され、さまざまな角度から精神病理学的に研究されてきた。その結果、これらのうつ病・抑うつ状態は、中高年に多くみられる執着気質（几帳面で凝り性、責任感が強い）やメランコリー親和型性格（几帳面、対配慮が本質的特徴、つねに秩序のなかにあり秩序との一体感をもつ）を基盤とした一般に重症となりやすいうつ病と異なる特徴をもつことが明らかになっている。近年では、さらに未熟型うつ病<sup>8)</sup>、現代型うつ病<sup>9)</sup>、ディスチミア親和型<sup>10)</sup>などが提唱されている。これらはいずれも上記①から④の特徴を多かれ少なかれもっているが、それぞれに切り口が異

\* 連絡先：〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学保健管理センター hiroki.kitae7@tohoku.ac.jp  
投稿資格：1

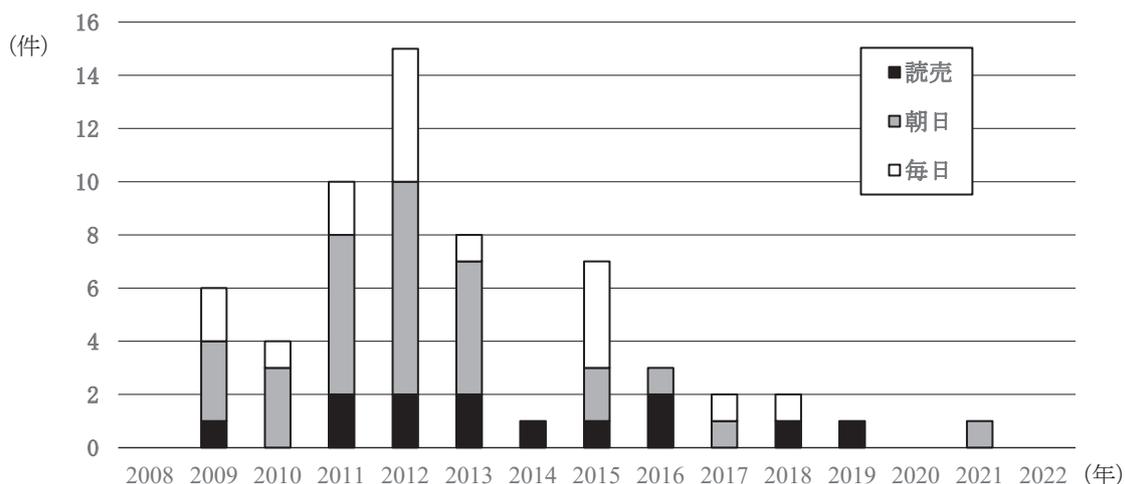


図1 記事数の変化

なり異なる病理を描き出している。また、いずれもメラニコリー親和型性格を基盤としたうつ病に比べて抗うつ薬の効果が弱く、軽症ながら難治な病態としても注目されてきた<sup>1)</sup>。

このような新型うつ病、ないしはこれに類似する精神疾患に関する医療情報は、精神科などの医療施設の受診時には医師から直接受け取るものの、新型うつ病に関する医療情報は啓発書やマスメディアが主導して社会に流布してきた経緯<sup>1)</sup>を鑑みると、受診前に患者自身が既に情報収集を行っていることが多いと考えられる。診療の際には、医師が患者に新型うつ病、ないしはこれに類似する精神疾患がどのような病気であるかを診療の初期段階で説明するが、患者自身があらかじめ抱えている病気の印象を把握しておくことは、患者との円滑な意思疎通を開始するうえで極めて重要となる。そこで我々は、新型うつ病がメディアでどのように報道されているかの検証が必要と考えた。

本研究ではメディアとして新聞を取り上げ、新型うつ病に関する記事を検索し、その報道内容を調査した。なお新聞記事は膨大な資料となるため、計量的テキスト分析であるテキストマイニングの手法を用いた。

## 2. 資料および方法

### 2.1 資料

研究対象を全国3大紙である読売新聞（読売）、朝日新聞（朝日）、毎日新聞（毎日）の3紙とし、各々の新聞記事データベースであるヨミダス歴史館、朝日

新聞クロスサーチ、毎索を用いて新聞記事の検索を行った。検索期間は各々の新聞記事データベースの検索可能開始年から2022年12月31日とした。検索可能開始年は、ヨミダス歴史館は1874年、朝日新聞クロスサーチは1985年、毎索は1872年であった。キーワードを「新型うつ」として検索し、検索結果として得られた記事のテキストデータを資料とした。

### 2.2 方法

#### 2.2.1 記事数および語の抽出

検索により得られた記事数の年毎の変化を調べ、次にテキストデータの分析を行った。分析は以前の我々の研究方法<sup>11)</sup>と同様にソフトウェアKH Coder<sup>12, 13)</sup>を用いてテキストマイニングを行った。テキストマイニングに際しては、資料とした各記事の見出しと本文のテキストデータをもとに、すべての語から重複、および助詞や助動詞のような一般的な語を除外して分析対象とする語を抽出した後、これらの語について出現回数を調べた。

#### 2.2.2 テキストの分析

共起ネットワーク分析、クラスター分析、および対応分析を行った。共起ネットワーク分析は、一定の分析単位の中で2つの語が同時に出現（共起）する比率が高い場合に「関連性が高い」と判断し、この共起度の強弱にもとづいて語のネットワークとして作成される。語と語の関連性（共起性）の程度を示す指標とし

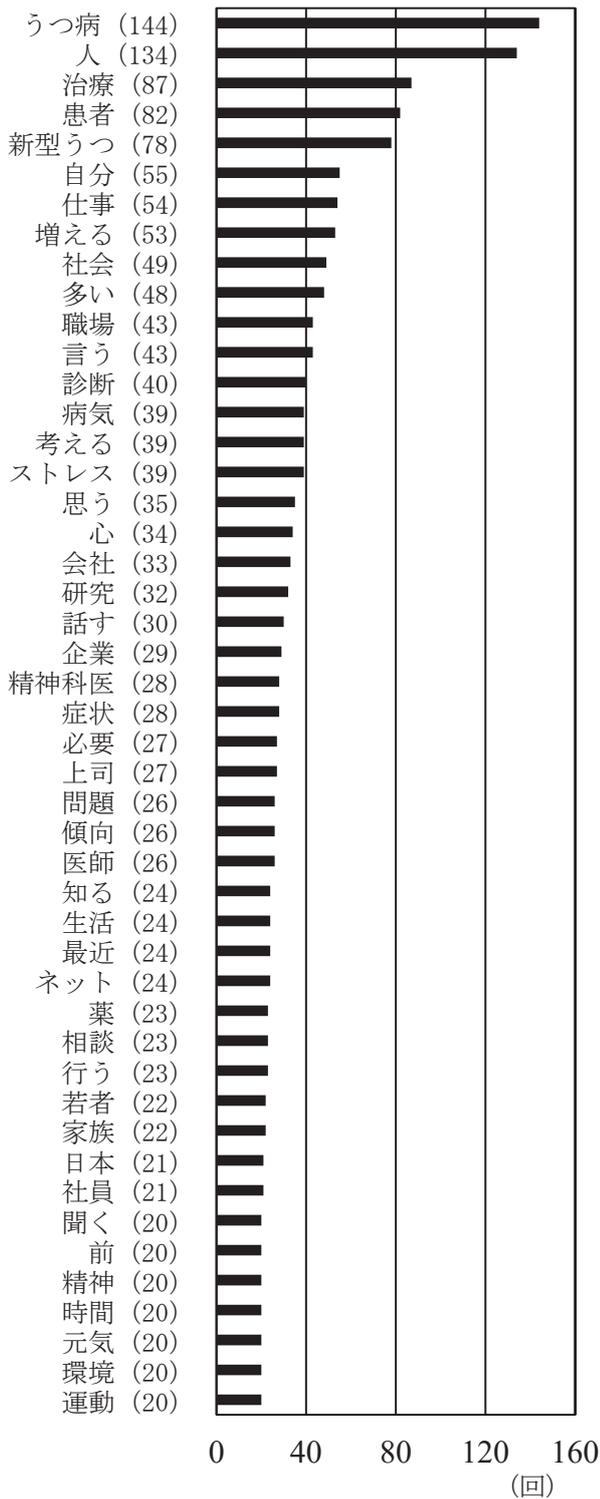


図2 抽出上位の語

い、分析結果として結果がまとめられていく様子を示す樹形図(デンドログラム)を作成した。対応分析は、出現パターンの似通った語を探索し、各々の語の出現パターンから成分を読み取る手法である。出現パターンの似通った語を可視化した結果として、関連の強い語群は近くに、弱い語群は遠くに布置(プロット)される。また原点近傍に布置される語は平均的に出現している語で、原点から外れている語は出現が特徴的な語となる。この分析結果として語の出現パターンを可視化した図を作成した。

### 3. 結果

#### 3.1 記事数および抽出された語

##### 3.1.1 記事数

各紙の検索記事数は、読売が15件、朝日が30件、毎日が18件の合計63件であった。このうち著作権などの関係で記事本文を参照できない記事を除くと、読売が13件、朝日が30件、毎日が17件となった。これらの合計60件を研究対象の記事とした。

最初の記事がみられた年は3紙ともに2009年で、最後は毎日が2018年、読売が2019年、朝日が2021年であった。記事数の年変化は、3紙合計では2012年の15件をピークとした単峰性を示し、2016年以降は急減した。各紙別にみると、朝日と毎日は共に2012年が最多で、読売は年間最多でも2件と少なかったが、3紙合計でのピークとなった2012年を挟む2011年から2013年は毎年2件みられた(図1)。

##### 3.1.2 抽出された語の出現回数

「うつ病」(144回)が最も多く、次いで「人」(134回)、「治療」(87回)が多かった。さらに「新型うつ」(78回)、「自分」(55回)、「仕事」(54回)、「増える」(53回)が続いた(図2)。

#### 3.2 テキストの分析

##### 3.2.1 共起ネットワーク分析

語のまとまりから6つのグループに分類された。6つのグループは各々、「原因」「仕事」「治療」「動向」「ネット依存」「診断」の特徴を有していた(図3)。

での距離係数はJaccard係数を用い、程度が強い語を線で結んだネットワーク図を作成した。クラスター分析は、語を互いの類似度に従って段階的にグルーピングして、いくつかのグループに分割する手法で、出現パターンが類似している語の群を特定する。クラスターの結合方法はWard法、距離係数はJaccard係数を用

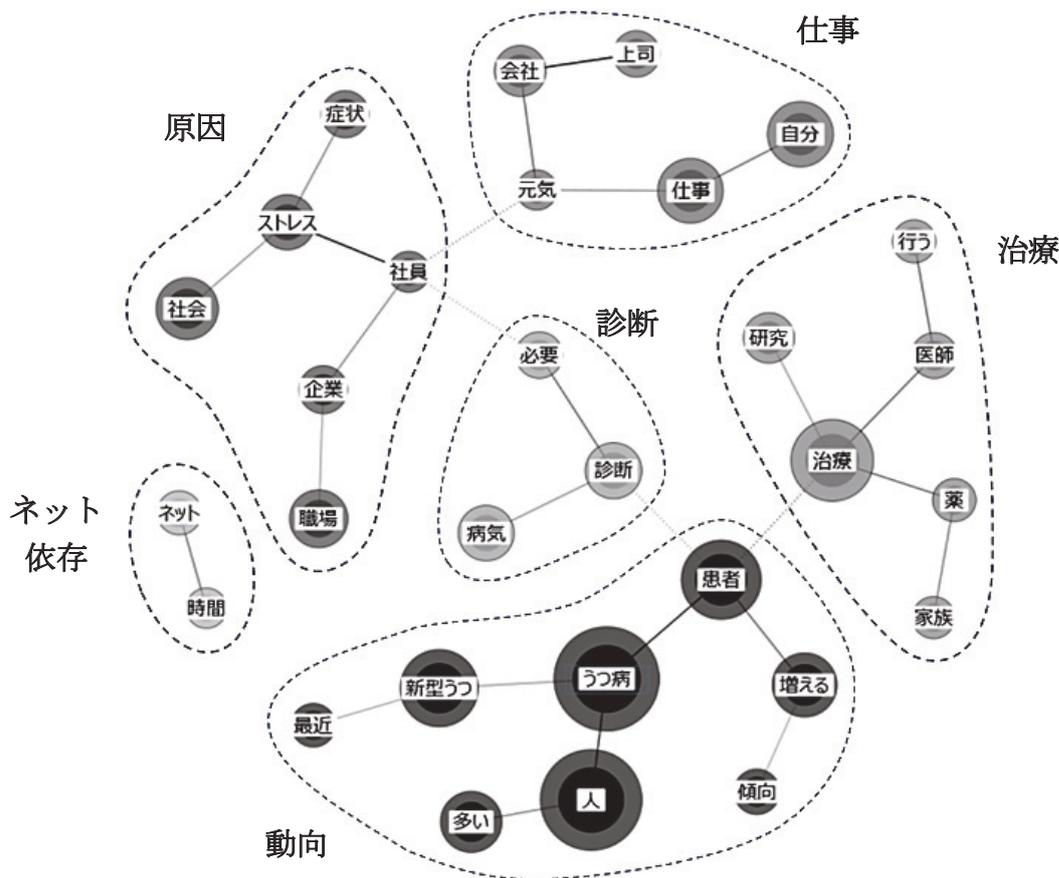


図3 共起ネットワーク分析

### 3.2.2 クラスタ分析

語は類似性の高い組み合わせからクラスターが形成され、6つのクラスターに分類された。これらのグループは各々、「治療」「名称」「動向」「社会背景」「原因」「仕事」の特徴を有していた（図4）。

### 3.2.3 対応分析

成分別の語の布置位置をみると、左右方向においては、左に行くほど「研究」「治療」「医師」などの治療する側の語群、右に行くほど「自分」「上司」「思う」「言う」などの治療される側の患者の個人的側面に関連が深い語群が布置されていることから、成分1軸は医療の立場を弁別する次元と考えられた。また上下方向においては、下に行くほど「研究」「企業」などの研究開発に関する語群、上に行くほど「医師」「患者」などの治療に関連の深い語群が布置されていることから、成分2軸は医療の研究と臨床を弁別する次元と考えられた。

原点近傍に布置された語群は新型うつ病の概要に関する語が多く、これらは出現が平均的な語群であった。また原点から遠くに布置された「研究」「医師」「企業」は医療の研究開発に関連が深い語群で、これらは出現が特徴的な語群であった（図5）。

## 4. 考察

### 4.1 新聞記事の主要な題材

新型うつ病に関する新聞報道は、共起ネットワーク分析とクラスター分析から、新型うつ病の原因、仕事との関連、治療、動向、社会背景などを題材としていることが明らかとなった。さらに対応分析からは、新型うつ病の病状の紹介や、その社会背景は平均的に取り扱われる一方で、研究や医師、治療のような新型うつ病の治療に関連する題材は、治療の紹介の記事中で主体的に扱われていたことが明らかとなった。記事中の語の出現回数をみると、「うつ病」「人」「治療」「患者」「新型うつ」が多かった。次いで「自分」「仕事」「増

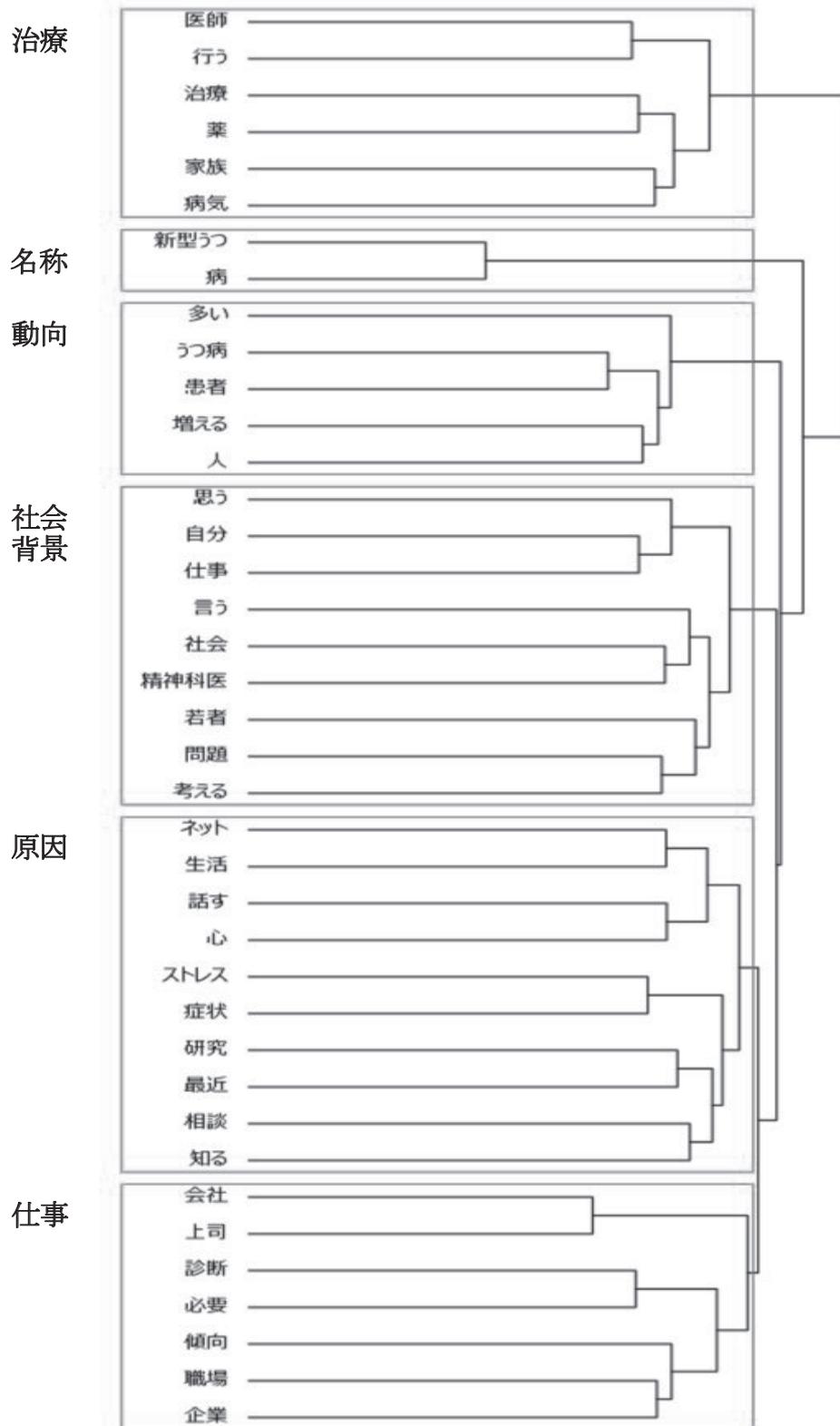


図4 クラスタ分析

える」「社会」「多い」「職場」などが続いた。このうち「人」「患者」「自分」は一般的な語で「うつ病」「新型うつ」は本研究の検索キーワード、ないしはそれに類する語であることから、特徴語としては「仕事」「増

える」「社会」「多い」「職場」などが多いことが明らかとなった。さらにこれらの特徴語の複数が、共起ネットワーク分析の動向の特徴を有するグループ、クラスタ分析の動向の特徴を有するクラスタに含まれる

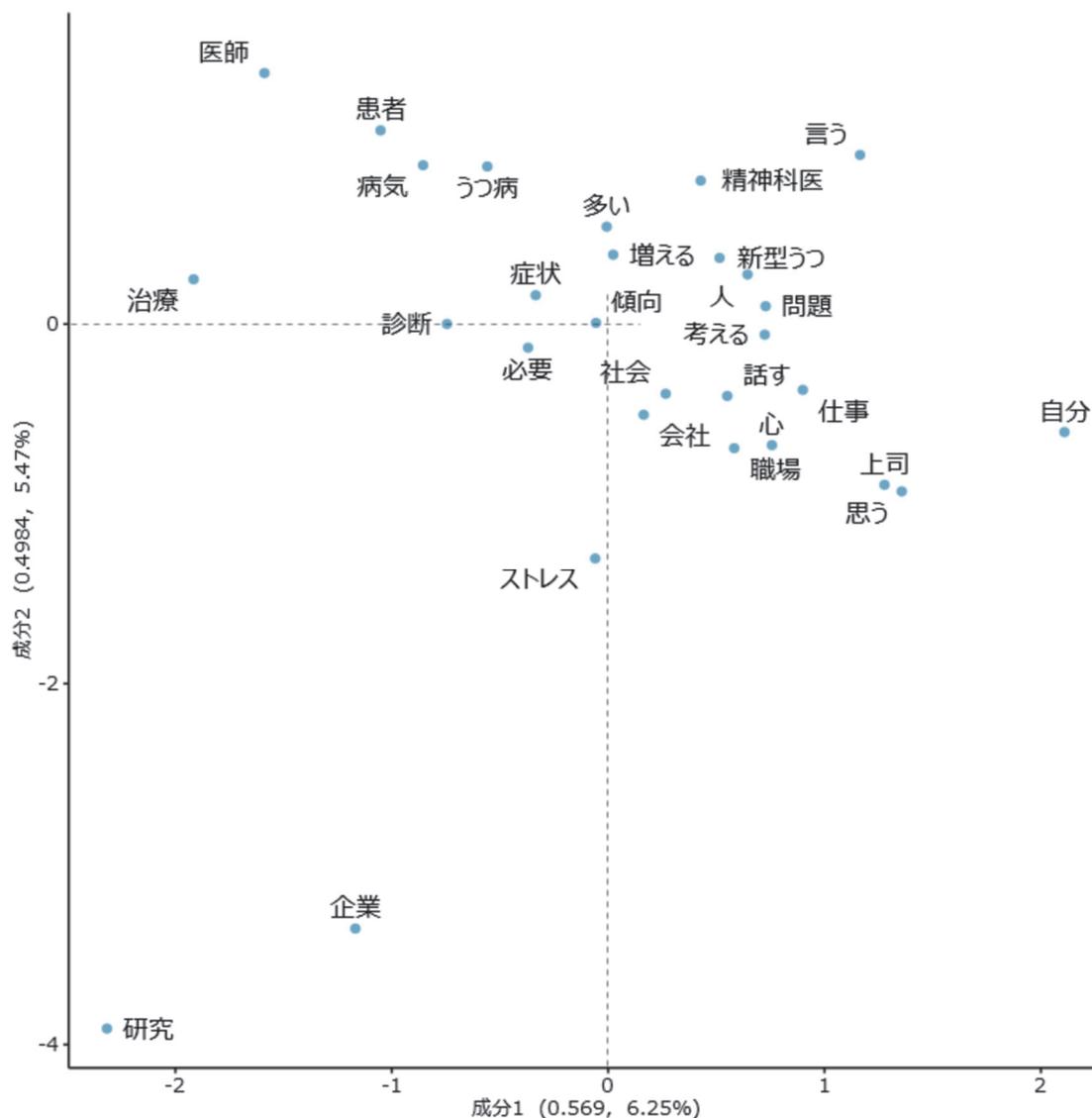


図5 対応分析

語で、対応分析でも原点近傍に近接して布置、すなわち平均的に出現していた。記事中でのこれらの語は『職場のなかで新型うつ病が増加している、多くなっている』との主旨の文脈で出現していた。したがって新型うつ病に関する新聞報道を特徴付ける重要な要素として、職場における新型うつ病の増加を上げることができると考えられた。また多くの記事で解説されていた新型うつ病の概要については、日本うつ病学会のホームページにて記載された新型うつ病の特徴<sup>1)</sup>とほぼ合致するもので、内容は正確で信頼性の高いものと考えられた。

#### 4.2 新型うつ病の増加傾向

本研究で取り上げた記事には、このように新型うつ病の増加傾向が多く記載されていたが、各新聞社が行った調査に基づいた調査報道はみられず、統計資料を引用するなどのエビデンスも示されていなかった。しかしマスメディアのなかで、新型うつ病に関するテレビ番組<sup>3, 4)</sup>を放送したNHK取材班は放送に先立ち上場企業2,277社へのアンケート調査を独自に実施している<sup>14)</sup>。有効回答数は512社で、「5年前と比べて新型うつ病の社員の増減はありますか？」との問いに対して、「増えた」と回答した企業は255社（50%）、「ほぼ同じ」と回答したのは148社（29%）、「減った」と回答したのはわずか10社（2%）であった。さらに「メ

ンタルヘルスの問題を抱える社員のうち、新型うつとみられる社員はどのくらいの割合でいますか？」との問いに対して、最も多かった回答が「2割以上4割未満」が119社（23%）で、「4割以上6割未満」が61社（12%）、「8割以上」が35社（7%）であった。また、この5年以内に新型うつ病の存在を認識した企業は7割近くに上っていた。さらに新型うつをテーマにした「クローズアップ現代」の制作に際して行った、日本精神神経科診療所協会に所属する東京都と神奈川県153の精神科クリニックを対象として98のクリニックから回答を得たアンケート調査<sup>14)</sup>によれば、「10年前と比べて新型うつとみられる患者は増加しているか？」との問いに対して「かなり増えている」と回答した医師は48人（52%）、「やや増えている」と回答した医師は34人（37%）で、90%近い医師が新型うつ病の増加を認識していた。このようにNHKの調査報道によれば、新型うつ病の増加傾向は明らかといえる。

一方、新型うつ病は精神医学での専門用語とみなされていないためか<sup>1, 2)</sup>、その学術的な実態調査は我々が検索した限りでは見当たらず、厚生労働省の患者調査にも新型うつ病に該当する調査項目は存在しない<sup>15)</sup>。ただしうつ病と職場におけるメンタルヘルス不調者の増加傾向は、政府による大規模調査で明らかになっている。厚生労働省による患者調査<sup>15)</sup>によれば、気分〔感情〕障害（躁うつ病を含む）の推計患者数総計は2005年に百万人を超え、2020年には119.4万人に達している。うつ病患者の医療機関の受診率は低いことが知られていることから、実数はこれより多いと考えられる。またメンタルヘルスの問題は産業領域において非常に深刻で、患者調査の気分〔感情〕障害（躁うつ病を含む）の患者数を年齢階級別にみると30代から40代を中心とした働き盛りの世代が多い。また厚生労働省による労働者健康状況調査<sup>16)</sup>によれば、過去1年間（2021年11月1日から2022年10月31日までの期間）にメンタルヘルス不調により連続1か月以上休業した労働者又は退職した労働者がいた事業所の割合は13.3%〔前年調査10.1%〕、メンタルヘルス不調により連続1か月以上休業した労働者の割合は0.6%〔同0.5%〕、退職した労働者の割合は0.2%〔同0.2%〕となっている。また現在の仕事や職業生活に関することで、

強い不安、悩み、ストレスとなっていると感じる事柄がある労働者の割合は82.2%〔同53.3%〕に達している。このようにうつ病患者の増加<sup>15)</sup>とメンタルヘルスに問題を抱えた社員の増加<sup>16)</sup>という社会背景と、新型うつ病の増加<sup>14)</sup>を示すエビデンスがみられることから、『職場のなかで新型うつ病が増加している、多くなっている』との主旨は相当程度に信頼できる医療情報といえる。しかし、紙幅の制限があるものの、健康を左右する医療情報であることからNHKによる医療報道<sup>14)</sup>のように新聞記事中に可及的にエビデンスを挿入することが望ましいと考えられた。

#### 4.3 うつ病の新聞記事との相違点

以前の我々の同様の研究<sup>11)</sup>によれば、うつ病に関する記事数は調査期間が2016年から2020年の5年間で3093件であった。一方、新型うつ病に関する本研結果では、調査期間が検索可能開始年から2022年までと長いにもかかわらず60件で、うつ病の1.9%に過ぎなかった。さらに調査期間をうつ病に揃えると、新型うつ病は僅か8件で、うつ病の0.26%に過ぎない。このように新型うつ病の記事数はうつ病と比べてきわめて少ないことが明らかになった。

また、うつ病での特徴的な語は、「自殺」が最も多く、内容はうつ病の概要やうつ病患者の実態はもとより、自殺や労災に関するものが多かった<sup>11)</sup>。一方、新型うつ病に関する本研究結果では、「自殺」は出現数の多い特徴的な語とはならず、共起ネットワーク分析とクラスター分析においても「自殺」を含むグループやクラスターは形成されなかった。このように「自殺」に関する題材の多寡が、うつ病と新型うつ病との記事における明確な相違点と考えられた。これは自殺の原因に重度のうつ病が深く関連することが多いのに対し、新型うつ病は全体に軽度で症状は軽度のうつ病と類似する<sup>1)</sup>とされるように、自殺に至るような重症のうつ病とは本質的に異なる病態であるためと考えられた。

#### 4.4 記事数の増加傾向

新型うつ病の記事数の変化をみると、2009年に最初の6件がみられ、2012年にピークの15件を迎えるが、これ以降は急減し2020年は0件で、2021年の1件が最

後であった。このような記事数の変化と「新型うつ、現代型うつという言葉が2000年代に入り広まった」(朝日：2017.10.25, 朝刊)との記事、マスメディアとして影響力の強いNHKにおける新型うつをテーマにした「クローズアップ現代」の放送が2011年11月22日、「NHKスペシャル 職場を襲う”新型うつ”」の放送が2012年4月29日<sup>3)</sup>であることを勘案すると、新型うつ病の新聞報道は2000年代から広がり始めた新型うつ病を2009年に初めて取り上げ、他のマスメディアによる報道と同様に2012年頃をピークとした一過性の現象だったと考えられた。

翻って、この一過性の現象を精神医学の観点からみると、生田<sup>17)</sup>は新型うつ病は流行語であって、精神医学的な臨床概念としては確立しておらず、そこにはいろいろなうつ状態が雑居している。しかし現代日本の時代精神を反映しているもので、その意味で新型うつ病はきわめて流動的であり、数十年の時間スパンに耐えるかどうかは疑問であると述べている。この精神医学の観点からみた新型うつ病の流動性は、本研究の新聞報道の観点から明らかとなった2012年頃をピークとした一過性の現象との結果と相通じるもので、精神医学の観点からみた新型うつ病もまた、まさに流行語として精神医学的な臨床概念を確立しないまま、他の概念にとって代わる可能性がある。

なお、日本うつ病学会による新型うつ病に関する見解は明確である。同学会のホームページ<sup>1)</sup>にて、「「新型うつ病」という専門用語はありません。むしろ精神医学的に厳密な定義はなく、そもそもその概念すら学術誌や学会などで検討されたものではありません。」と表明している。同様に日本うつ病学会治療ガイドライン<sup>2)</sup>では、「専門家の間では、若年者の軽症抑うつ状態の研究が盛んに行われている。この一側面を切り取った「現代型(新型)うつ」は、マスコミ用語であり、精神医学的に深く考慮されたものではなく、治療のエビデンスもないので、取り上げていない。」との記載がある。このように新型うつ病は、専門の学会によって認められた正式な病名ではなく、学問的な信頼性と妥当性を有していない。

#### 4.5 新聞報道における医療情報の信頼性

本研究では、研究対象として新聞記事を取り上げた。勝谷ら<sup>18)</sup>は大学生を対象に新型うつ病の情報源を調べた結果、テレビが最も多く、次いでインターネットが多かったと報告している。テレビは信頼できるメディアとして一般に認識されているが<sup>19)</sup>、健康情報娯楽番組に情報の誤りや誤解などが多々紛れ込んでいることが指摘されており<sup>20)</sup>、同様にインターネット上の医療情報は信頼性が十分でない情報が含まれていることも多い<sup>21)</sup>。一方、本研究で対象とした新聞は情報の正確さと信頼性は全メディアの中で最も高い評価を受けている<sup>22)</sup>。事実、本研究結果から明らかになった記事中の新型うつ病の概要は、日本うつ病学会による解説<sup>1)</sup>とほぼ合致するもので、正確で信頼性の高いものと考えられた。しかしテレビやインターネットはもとより、新聞などのメディアから取り入れた新型うつ病をはじめとした医療情報は十分吟味して活用する必要があると考えられる。

#### 5. 結論

新型うつ病に関する新聞記事をテキストマイニングの手法によって調べたところ、特徴的な語としては「仕事」「増える」「社会」「多い」「職場」などが多く、職場における新型うつ病の増加という、新型うつ病の動向を解説する記事が多かった。また記事は2009年に初めてみられ、2012年のピーク後は急減して2022年にはみられなくなった。記事中の新型うつ病の概要は、日本うつ病学会による解説とほぼ合致するもので、正確で信頼性の高いものと考えられた。

#### 謝辞

本研究はJSPS科研費 JP21K12578の助成を受けたものです。

#### 引用文献

- 1) うつ病Q & A Q4新型うつ病が増えていると聞きます。新型うつ病とはどのようなもののでしょうか？  
日本うつ病学会、2012。  
[<https://www.secretariat.ne.jp/jsmd/ippan/qa.html> (cited 2023-Oct-1)]。

- 2) 日本うつ病学会治療ガイドライン II. うつ病(DSM-5) / 大うつ病性障害 2016. 日本うつ病学会, 2016.  
[<https://www.secretariat.ne.jp/jsmd/iinkai/katsudou/data/20190724.pdf> ( cited 2023-Oct-1 )].
- 3) NHKスペシャル 職場を襲う "新型うつ". NHK ホームページ, 2012.  
[<https://www.nhk.or.jp/special/detail/20120429.html> ( cited 2023-Oct-1 )].
- 4) NHKスペシャル反響編 職場を襲う "新型うつ" NHK ホームページ, 2012.  
[<https://www.nhk.or.jp/special/backnumber/20120927.html> ( cited 2023-Oct-1 )].
- 5) 笠原嘉・岡本重慶 (訳). 学生のアパシー. 石井完一郎ほか (監訳). 学生の情緒問題. 文光堂, 1975 : 106-120.
- 6) 笠原 嘉. 退却神経症—無気力・無関心・無快樂の克服. 講談社, (1988).
- 7) 広瀬徹也. 「逃避型抑うつ」について. 宮本忠雄編. 躁うつ病の精神病理 2. 弘文堂, 1977 : 61-86.
- 8) 阿部隆明, 大塚公一郎, 加藤 敏, 他. 「未熟型うつ病」の臨床精神病理学的検討: 構造力動論 (W. Janzarik) からみたうつ病の病前性格と臨床像. 臨床精神病理 1995 ; 6 : 239-248.
- 9) 松浪克文, 上瀬大樹. 現代型うつ病. 精神療法 2006 ; 32, 3 : 308-317.
- 10) 樽味 伸. 現代社会が生む“ディスチミア親和型”. 臨床精神医学 2005 ; 34 : 687-694.
- 11) 北浩樹, 伊藤千裕, 木内喜孝. 全国3 大新聞にみるうつ病の医療情報—テキストマイニングによる解析—. 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要 2022 ; 8 : 285-292.
- 12) 樋口耕一. テキストデータの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合. 理論と方法 2004 ; 19, 1 : 101-115.
- 13) 樋口耕一. 社会調査のための計量テキスト分析第2版. ナカニシヤ出版, 2004.
- 14) NHK取材班. 職場を襲う「新型うつ」. 文藝春秋, 2013.
- 15) 令和2年 患者調査 傷病分類編 (傷病別年次推移表)]. 厚生労働省, 2020.  
[<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/10syoubu/> ( cited 2023-Oct-1 )].
- 16) 厚生労働省 (2022) 「令和4年 労働安全衛生調査 (実態調査)」, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/r04-46-50.html> (閲覧2023/10/1).
- 17) 生田 孝. 臨床現場における「新型うつ病」について. 労働安全衛生研究 2014 ; 7, 1 : 13-21.
- 18) 勝谷紀子・岡 隆・坂本真士. 大学生を対象とした「新型うつ」のしろうと理論の検討. 心理学研究 2018 ; 89, 3 : 316-322.
- 19) 田中 克己・山本 祐輔. 情報メディアとその信憑性. 映像情報メディア学会誌 2012 ; 66 : 891-895.
- 20) 高橋久仁子. テレビの健康情報娯楽番組における食情報の問題点. 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編 2006 ; 41 : 191-204.
- 21) 横井 遥・福田 里砂. インターネット上の医療情報の信頼性の検討—開腹手術に伴う術後疼痛に関する情報について—. 医療情報学 2013 ; 33 : 49-59.
- 22) 新聞オーディエンス調査 (定点調査). 日本新聞協会, 2023.  
[<https://www.pressnet.or.jp/adarc/data/audience/report.html> ( cited 2023-Oct-1 )].

